令和２年度　自己評価・学校関係者評価報告書

令和３年４月３０日
認定こども園さくら幼稚園・さくら保育園

１、　本園の教育

園訓「わたくしたちは、つよいからだとただしいこころをもったよいこになりましょう」のもと、生きる力の基礎を育み、心身ともに健康な子どもを育む。

２、　教育・保育の方針

・頭（HEAD）考える力を育む保育　・心（HEART）心を育む保育　・健康（HEALTH）健康な心と身体を育む保育　・人間関係（HUMAN　RELATION）人との関わりを育む保育

３、　目指す子ども像

・生き生きと遊ぶ子ども　・豊かな心をもった子ども　・元気な子ども　・思いやりをもった子ども

４、　令和２年度重点的に取り組む目標・計画

・読み取りや保育の振り返りを通して幼児理解を深め、遊びの充実を通して資質や能力を育て、課題を育ちにつなげていく。
・コロナ禍での保育や行事への取り組み方、衛生管理の徹底。
・保幼小連携の推進。

５、　評価項目の達成及び取り組み状況

	評価項目	評価	取り組み状況
1	読み取りを保育に生かす。	B	・読取りの中で子どもの思いをより深く読み取る目や、背景、育っている力、今後育てていく力等を見極め、保育計画や関わり、環境設定に生かすことができるようになってきた。
2	保育記録の充実を図る。	A	・読み取る力がついてきたことで月案や週案の記入も深まっている。記入した姿を 10 の姿に置き換えて見直し、記入をしていったことでクラスや個々の課題に向けて育ってきている力や育てていく力がより見えてくるようになった。
3	月案検討や園内研修会を充実させる。	B	・翌月の月案について各学年から一人ずつ出て 0～5 歳について内容やつながりや等を検討するようにした。 ・遊びの充実に向け、学年ごとに「全体の計画」や「幼児期に育みたい資質や能力」から育てたい姿を改めて考えながら保育にあたり、読み取った姿をもとに展開した保育を学年ごとにまとめ展示したり、園内研修会で発表したりした。また、全学年の育ちを一覧

			表にまとめ、共通理解するとともに育ちのつながりの重要性を確認した。次年度への保育や研究に生かしていきたい。
4	コロナ禍の保育や行事への新たな取り組みを考える。 衛生管理などを充実する。	B	・クラスまたは学年の保育を基本とし、集会は２クラスまでの集まりとした。その中で保育のねらいに合わせて異年齢の交流も行った。 ・保護者参加の行事は日時を分けたり参加人数を制限したりしながら行った。保護者が主体となって行なう「さくらまつり」は中止にしたが、5 歳児が主体となって子ども達が運営する「さくらまつりごっこ」として実施した。色々な行事を取りやめるのではなく取り組み方を変えることで保護者の方にも子ども達の姿を見ていただくことができた。また、子ども達が主体となって取り組むことで子ども達の成長に大きくつながった。 ・全園児の１日２回の検温と手指消毒、手洗いの励行、２歳児以上児のマスク着用を行った。また、37，5 度以上の発熱が見られた場合はすぐに迎えに来てもらうようにした。その効果で冬時期にも風邪での欠席が例年よりとても少なかった。 ・保護者も玄関での手指消毒やマスク着用の徹底、送迎も密にならないことや発熱や風症状のない方にしてもらうことを啓発していった。鳥取市に新型コロナ警報が出た時には園内への送迎は中止し、玄関での対応に切り替えていった。 ・行事参加時は当日の家庭での検温や受付での検温、健康状態の聞き取りなどをして健康状態の方のみの参加を徹底した。
	年長児と面影小学校５年生との交流を行う。 面影小学校校区で連携の職員研修会を実施する。	B	・1、３組との交流を３回行った。回ごとにねらいを立て、園児や 5 年生の姿を詳しく打ち合わせをしたことで、互いの実態の把握に繋がった。また、5 年生への親しみが増し小学校入学への期待も高まった。 ・オンラインで講師を招いて連携について保幼小合同研修会を行った。校区としてのこれからの取り組みの考え方などを示唆していただいた。来年度も交流等を続けていく予定である。

Ａ＝達成できた　　Ｂ＝８０％程度の達成度　　Ｃ＝60％程度の達成度　　Ｄ＝30％程度の達成度

６、　総合的な評価結果

結　果	理　　由
B	・コロナ禍、例年通り行えないことが多くあったが、特に行事や保育を見直す良い機会となり、新たな考えや保育の工夫に繋がった。また衛生管理にも気を配り、保護者の協力もあって色々な保育や行事に取り組めたことに感謝をしている。 ・遊びの充実に向け、学年ごとに「全体の計画」や「幼児期に育みたい資質や能力」から育てたい姿を改めて考えながら保育にあたり、各学年の育ちを充実することができた。また、全学年の

	育ちを一覧表にまとめ、共通理解するとともに育ちのつながりの重要性を確認した。次年度への保育や研究に生かしていくようにする。 ・東部地区の新型コロナウイルス発生警報等により保護者の方に園内に入っていただくことができない時期もあったが、園の教育・保育について理解や信頼を得られている。地域の中でおおむね園への理解は得られているがコロナ禍で、地域の方との交流や子育て支援の事業がほとんど行えない状態となったことは残念である。コロナが収まったら、地域の公民館、老人施設等との交流を増やし、さらに地域貢献をしていきたいと思う。

Ａ＝達成できた　　Ｂ＝８０％程度の達成度　　Ｃ＝60％程度の達成度　　Ｄ＝30％程度の達成度

７、　今後取り組むべき課題

	課題	具体的な取り組み方法
１、	職員の連携 保育内容・保育計画の充実	つながりの重要性を意識し、同学年はもとより未満児、以上児、いろいろな部所の職員との連携を深め、園児の育ちのつながりや互いの職務の充実につなげる。また、それを学年の月案や行事の計画に生かしていくことができるよう、月案検討会や職員会の話し合いを充実させる。
２	幼小連携の推進	授業参観や保育参観を実施し互いに子どもの姿や取り組みを知り合う。また、ともに学ぶ機会を持つ。園児と小学生との交流を続け「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有して教育保育の接続を図る。

８、　学校関係者の評価

・職員が道路での安全誘導や声掛けを徹底しており、園児や保護者の安全に配慮していた。また、園外活動時にも十分な職員配置の中、園児への交通安全指導もなされていた。 ・園の教育目標のもと、幼児一人ひとりを大切にした保育がなされ、コロナ禍ならではの行保育や行事の取り組みを工夫されていた。保護者アンケートなどでも保護者が保育や運営について理解や満足度が高いことはとても良いと思う。満足できていない少数の思いをさぐり、100 セントの満足を目指して努力をしていくことが大事だと思う。今後も目指す子ども像に向けた園の更なる取り組みに期待している。また、日々の挨拶や保育相談などを通しても更に連携を深めていきたい。